

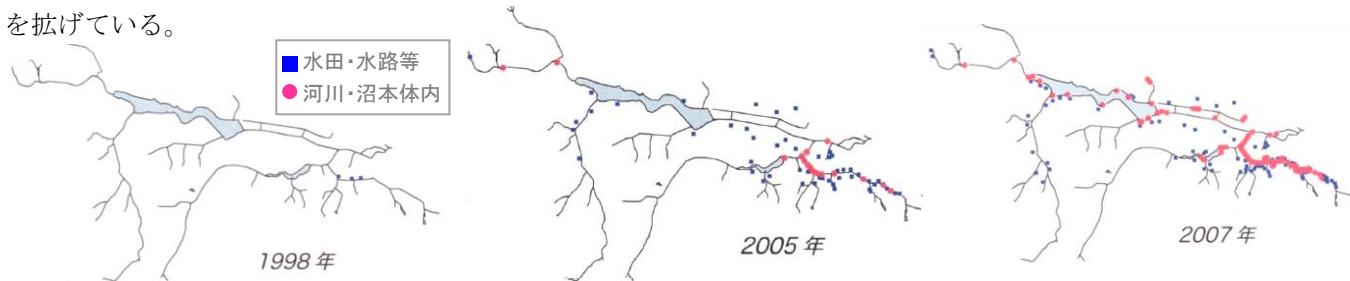
講演「手賀沼におけるナガエツルノゲイトウ繁茂域の拡大について」 講師/林 紀男さん (千葉県立中央博物館)

林さんは、千葉県立中央博物館の学芸員として手賀沼流域の水生生物調査に長年携わってこられた。ナガエツルノゲイトウについても初期侵入からどのように繁茂してきたかを丁寧に調査されており、繁茂の原因の一端も教えていただいた。(報告:竹中真里子)

農業灌漑用水により印旛沼から流入してきた

特定外来生物ナガエツルノゲイトウは、1998年亀成川流域の水田水路で初めて確認した。隣接する印旛沼から農業灌漑用水に植物体断片が混入し拡散してきたと推察され、灌漑用水にトラップをかけたところ、ナガエツルノゲイトウの茎等の破片を確認した。

2002年に亀成川の河川に侵入し、2007年には手賀沼全流域に繁茂域が拡大した。流域の水田畔では除草剤が多用され、畦畔だけ草が枯れた異常な景観が広く見られる。ナガエツルノゲイトウは除草剤耐性がある種もあり、全ての植物が枯れた畦畔に、灌漑水路で運ばれたナガエツルノゲイトウが真っ先に根付き、繁茂域を拡げている。



手賀大橋以西、特に大堀川河口から大津川河口にかけて繁茂が著しい

船外機付きボートから沼岸の状況を把握し、岸辺から胴長を着用して現場踏査を行い、地図上に繁茂地点情報を集約した。カヌーを用いた補足調査も併用した。

2010年時点では、水田畦・灌漑水路などでは全流域で繁茂していたが、沼本体の岸辺の群落は局所的で群落規模も小さかった。しかし、2012年は確認地点が大幅に増加した。特に顕著だったのは、大津川河口から大堀川河口までの南岸部である。大きなマット状の浮島状態となり、長径20mを超える群落もあった。沖合方向への奥行きは5~6mで、こうした浮島状の群落は波浪によって大きく揺れ、台風や強風時には群落の一部が破壊され沼に流れ出る状況も確認できた。

2014年は地点数・群落規模共に2012年を大きく凌駕する状態になった。群落は多数で、小さいものが多いが、北千葉導水第2機場前などでは大群落に生長し、横幅

50m以上、奥行き10mに達していた。さらに、北岸の根戸新田地区にも繁茂域が拡大し、若松地区のヨシ植生帯整備工事現場でも複数の繁茂地が確認された。

2014年の群落は岸辺のヒメガマ群落に大きく食い込み、ヒメガマの抽水茎の隙間に入り込んだナガエツルノゲイトウがヒメガマに固定支持され、沖合方向に群落を生長させていた。高さ方向への盛り上がりは、2010年は20~30cm程度であったが、2014年は場所によっては70cmに及んだ。特に群落基部となるヒメガマ帯のところで群落が高く盛り上がっており、基点がしっかりと確保されたことによって沖合へ安定的に生長可能になったことが推察された。大きな浮島状の群落が波浪によってゆったりと大きく波打つ様子が数多くの地点で観察される。沼西域に比較すると沼東域では、群落数は多いが規模は西側より小さく限局的である。

本報告は下記の文献から文と図を抜粋し一部改変して引用し作成。

- ・林紀男・横林庸介・竹中真里子(2008)手賀沼流域におけるナガエツルノゲイトウ繁茂域の変遷. 千葉生物誌. 58(1): 1-6.
- ・林紀男・井上恭二・本橋敬之助(2014)印旛沼流域におけるナガエツルノゲイトウ繁茂域の変遷. 千葉生物誌. 64(1): 9-14.
- ・林紀男・八鍬雅子・間野吉幸・野口隆也(2015)手賀沼西部におけるナガエツルノゲイトウ繁茂域拡大. 千葉生物誌. 64(2): 49-51.

